

山梨県立文学館 館報

1989(平成元年)年
11月 創刊

第105号



「赤い鳥」の時代 牛山恵 2
 特設展「童話の花束 子どもたちへの贈り物」展示資料より 3
 追悼 廣瀬直人・閲覧室より 4

教育普及より・館からのご案内・
 寄贈資料より
 資料翻刻 5
 津島美知子 早川徳治宛書簡 6・7
 館の日記 利用のご案内 8

特設展

「童話の花束 子どもたちへの贈り物」開催

平成三十年七月十四日(土)～八月二十六日(日)

芥川龍之介、前田晁^{あきら}、徳永寿美子、村岡花子ら山梨出身・ゆかりの文学者の児童文学作品を紹介する展覧会。

芥川龍之介は「赤い鳥」創刊号(一九



芥川龍之介 鈴木三重吉宛書簡 1919(大正8)年11月9日 当館蔵
「赤い鳥」1920(大正9)年1月号に掲載された「魔術」の原稿について記している。

一八年七月)に「蜘蛛の糸」を発表以降、同誌に計五編の童話を寄せている。歿後には生前から出版が計画されていた童話集『三つの宝』が刊行された。

前田晁は、童話の創作や翻案のほか歴史読物として『少年国史物語』を刊行。また、村岡花子の初めての翻訳本『王子と乞食』の完成を見守り、宇野浩二から「摇篮の唄の思ひ出」の改稿原稿を送られるなど、多くの児童文学作品の出版に携わった。徳永寿美子は前田晁と結婚後、童話創作を始め、母親がわが子に話を語り聞かせることの大切さを説いた。

このほか、アンデルセンの童話を翻訳した本県出身の矢崎源九郎、疎開をきっかけに山梨に居住し、「マスの大旅行」「山ばとクル」など、精緻な自然観察を基に独自の動物読物を執筆した太田黒克彦らの作品を、原稿や書簡、図書、雑誌など約六十点の資料で紹介する。

常設展観覧料でご覧いただける。

■特設展関連イベント

○特設展関連講座(年間文学講座3)

「童話創作の背景」芥川龍之介・村岡花子・徳永寿美子」
 ※要申込

7月22日(日)午後2時
 講師 保坂雅子(当館学芸課長)

参加費 無料
 会場 研修室 定員150名

○子どもワークショップ ※要申込
 「デコパージュで『童話の花束』を身近に」

特設展「童話の花束」に登場するモチーフをデコパージュで身近な物に飾り付けます。
 7月29日(日)午後1時30分
 講師 小林睦実(美術講師)

対象 小学生以上の親子10組
 材料費 500円
 持ち物

デコパージュしたい無地の物(上履き、Tシャツ、かばん、カップ、皿、固形石けんなど)

会場 研修室

○閲覧室資料紹介

「みんなで読もう日本の名作」
 7月14日(土)～8月26日(日)

入場無料

※年間文学講座につきましては、ご案内を5頁に掲載しております。
 ※要申込のイベントにつきましては、お電話か当館受付でお申込ください。

予告 秋の企画展

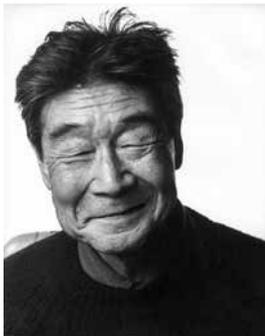
「歿後三十年

草野心平展

ケルンクックの詩人、富士をうたう。」

9月22日(土)～11月25日(日)

詩人・草野心平の生涯と詩の世界を紹介する。草野にとつて重要なテーマとなった富士山の詩の原稿や書画のほか、山梨との関わりについても展示。また、蛙の詩を集めた詩集等、個性溢れる詩の世界をご覧いただきたい。



草野心平
撮影 小林正昭
提供 いわき市立草野心平記念文学館

「赤い鳥」の時代

牛山 恵

大正時代とは、どんな時代だったのだろうか。『朝日新聞一〇〇年の重要紙面』には、「大戦もなく、言論は盛んに行われ、国民の権利は漸進し、あるいはもつとも明るい時代だったと言うべきかも知れないのである。」とある。昭和までのわずかに一五年間ではあったが、「大正デモクラシー」「大正リベラリズム」「大正ロマン」などの言葉が、大正という時代のつかの間の輝きを象徴しているように思われる。

一九一八(大正七)年七月一日、鈴木三重吉によって「赤い鳥」が創刊された。「赤い鳥」の標榜語^{モットー}には「世俗的な下卑た子供の読みものを排除して、子供の純性を保全開発するために、現代第一流の芸術家の真摯なる努力を集め、兼て、若き子供のための創作家の出現を迎ふる、一大区画的運動の先駆である。」とある。児童文学の研究者である滑川道夫は

「児童芸術運動のうねり」と言い、鳥越信は「著名な文壇作家に賛同を呼びかけての、芸術的雑誌をめざしたものであった。」と言う。また、西田良子は「毎号並べられた錚々たる文壇人の名前は、童話から、(婦女童蒙の書)という古いイメージを取り払い、童話の文学性を認めさせるには大いに役だった。」¹⁾と言いつても芥川龍之介、有島武郎、島崎藤村らについては、「積極的な創作態度で、独自の優れた童話文学をつくり上げていった。」²⁾と述べている。

芥川龍之介の「読者対象として児童を意識して書いた作品」(増子正一)には「蜘蛛の糸」「犬と笛」「魔術」「杜子春」「アグニの神」(以上が『赤い鳥』掲載)、「仙人」「三つの宝」「白」「三つの指輪」などの九編がある。「蜘蛛の糸」は芥川が初めて書いた児童文学作品で、「赤い鳥」創刊号に収載されている。この話の原典

は、ポール・ケラスの「カルマ」であることが定説となっており、「人類永遠の問題・利己心の悲しさを主題としており、おとなを読者対象にし得る画期的童話である。」(増子正一)と評されている。この作品を、自らのエゴイズムによって救われる機会を逸した犍陀多の物語と読む

か、一度は救おうとした犍陀多を救えなかったお釈迦様の物語と読むか、議論のあるところではあるが、名作として教科書教材にもなってきた。ところが、この作品について、児童文学研究者である古田足日は、「くもの糸」は名作か(『現代児童文学論』)という論文の中で「二流の読物だと思う。」と述べた。また「この作品の主要なテーマは、芥川の意図のいかんにかかわらず、勸善懲惡、既成のモラルを鼓舞するものでしかないのである。」と述べ、「作品全体が、おとなの立場からする修身として構成されている」とも述べている。この古田の説に出会ったとき、私自身、「悪いことをした犍陀多が再び地獄に落ちる」ことに納得し、自分とは無関係な話として楽しく読めたことと理由が明確になったように思った。そして「一流の読み物ではあっても、すぐれた文学ではない。」という言葉が胸に刺さった。しかし、近代文学の名作とし

て、この作品に対する評価は今もって高い。

「恐慌と戦争の時代である。」(『朝日新聞一〇〇年の重要紙面』)と称された昭和の始まりは一九二六年であった。「赤い鳥」は一九二九(昭和四)年に一次休刊し、一九三一(昭和六)年に復刊する。一九三一年から一九四五(昭和二〇)年まで、日本は一五年戦争のただ中であつたが、「赤い鳥」によってともされた児童文学の灯火は消えることはなかった。坪田譲治、与田準一などの作品掲載作家の中には新美南吉もいた。小学校の国語教材の定番となつている「ごん狐」は、一九三二(昭和七)年の一月号に収載されている。「赤い鳥」は、鈴木三重吉の死によって、一九三六(昭和一一)年に廃刊となり、芸術的児童文学の側からみると、坪田譲治命名の「冬の季節」の到来であつた。しかし、大正末から昭和にかけて、社会主義的立場に立つプロレタリア児童文学運動や「少年倶楽部」に代表される大衆的児童文学は隆盛であつた。そして、終戦後、一九四七(昭和二二)年、石井桃子の空想物語『ノンちゃん雲に乗る』から、戦後の豊かな児童文学の時代が始まるのである。

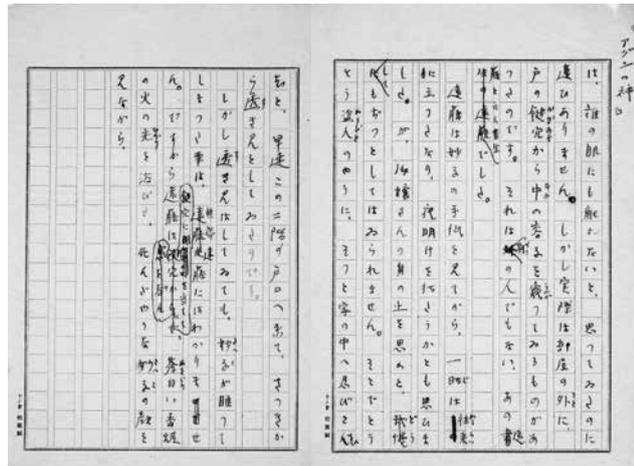
(都留文科大学名誉教授)

■特設展

「童話の花束 子どもたちへの贈り物」 展示資料より

①芥川龍之介「アグニの神」草稿

当館蔵



「アグニの神」は、日本人の書生遠藤が、印度人の老婆が住む上海の或る家で誘拐された少女妙子を発見し、老婆のもとから救出出す話で、「赤い鳥」第六巻第一号と第二号（一九二二年一月、二月）に掲載された。当館で所蔵するのは、「十ノ廿松屋製」二〇〇字詰め原稿用紙十二枚に書かれた第二号掲載の第四章からの草稿。写真は第五章の前半で妙子の手紙を見た遠藤が、老婆の家に忍び込み、鍵

穴から覗いている場面だが、初出とは若干の違いがある。このほか、草稿からは、妙子が病院で目を覚ましたり、父親に手紙で救助されたことを報告する場面や、老婆が傷一つない状態で死ぬ設定などの構想があったことが窺える。

本資料と同じ「十ノ廿松屋製」原稿用紙四十七枚に書かれた原稿が、天理大学附属天理図書館に所蔵されている。

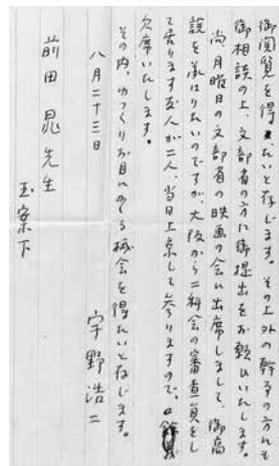
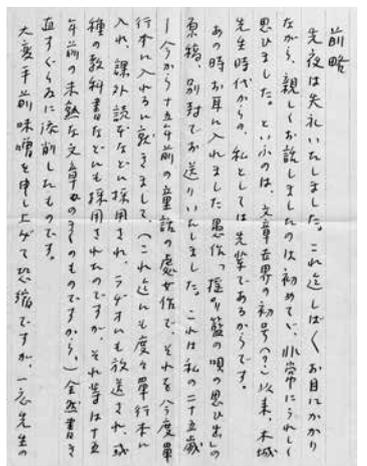
②宇野浩二 前田晁宛書簡（封書）

一九三〇（昭和五）年八月二十三日

当館蔵

前田晁（一八七九〜一九六一筆名木城など）は山梨市に生まれ、早稲田大学卒業後、坪内逍遙の推挙により一九〇六（明治三十九）年、博文館に入社。田山花袋を助け、一九一三（大正二）年四月まで「文章世界」の編集者として敏腕を振るい、その後も執筆者として関わった。また、ゴンクールやモーパッサンなどの翻訳を手掛ける一方、「金の船」等に童話を発表、童話集『銀の翼』（一九二四年十一月金星社）の他、歴史読物として『少年国史物語』全六巻（一九三三〜一九三六年早稲田大学出版部）を著した。

本資料は、宇野浩二（一八九一〜一九六一）が、「少女の友」第八巻第六号（一九一五年五月）に発表した「揺籃の唄の思ひ出」（以下「揺籃」）を単行本に収めるにあたり、「全然書き直すぐらゐるに添削したもの」を別便で送ったので「先生の御閲覧を得たい」という依頼の書簡。こ



の「単行本」については、同年十月一日付書簡（封書 当館蔵）に、「童話集は今月中旬に発行の予定です」とあることから、同年十月七日刊行の『母いづこ』（大日本雄弁会講談社）への収録と思われる。『文学者の日記6宇野浩二（1）』（二〇〇〇年一月博文館新社）によると、一九三〇年の日記には、八月二十日に新宿白十字で行われた童話作家協会の会合に出席し、文部省に童話映画を提出する件で、晁に「揺籃」を出す話をして帰り、二十三日に清書原稿と手紙を送った記述がある。

八月二十三日付書簡の冒頭に「文章世界の初号（？）以来、木城先生時代から、私としては先輩であるからです」とあるが、宇野は、一九一九（大正八）年

四月、「文章世界」に初めて掲載された作品「蔵の中」が文壇に注目され、以後も同誌に小説や評論を寄せている。

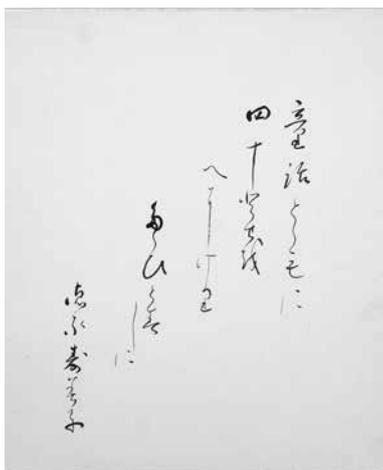
③徳永寿美子「童話とともに四十とせをへにけりただひとすじに」色紙

当館蔵

「山梨日日新聞」の記者で詩人の小林富司夫（一九一七〜一九九六）旧蔵。色紙裏に「1891.10.30」と記されている。

徳永寿美子（一八八八〜一九七〇本名前田ひさの）は甲府市に生まれ、東京府立第二高等女学校卒業後、前田晁と結婚。自分の子どもに、度々話をせがまれたことが童話の創作に繋がったという。母親の愛情をテーマとする作品群は「お母さん童話」と呼ばれた。童話集に『薔薇の踊子』（一九二二年二月アルス）、『大将のお馬』（一九四一年八月金の星社）等があり、「小公子」などの翻案や昔話の再話も行った。

（学芸課 保坂雅子）



■追悼 廣瀬直人

廣瀬直人氏を悼む

三枝 昂之

その句業の大きさは周知のことだが、廣瀬さんは当文学館にとっても大切な人である。

一九八九年、平成元年に開館した山梨県立文学館の初代学芸課長が廣瀬さんだったが、このときから文学館に関わったのではない。文学館建設構想が持ち上がり、昭和六十年に県教育委員会文化課に建設推進担当が設置されるとチーフを務め、計画段階からその推進役を担って下さったのである。

何時だったかはつきりしないが、廣瀬さんが一献の場に誘って下さったことがある。そのとき同席したのが当時の文学館の人々、準備段階からのメンバーですよ、と頼もしそうに紹介して下さった。神津氏、福岡氏、一瀬氏の名が浮かんでくるがそこは自信がない。

大勢の人々の献身的努力があつて文学館の今日はあるが、その中心的な一人が廣瀬さんであることを心に刻んでおきたい。

廣瀬さんとは二度一緒に仕事をした。

一度目は平成十年二月の当文学館での鼎談「やまなしを歌う やまなしを詠む」だった。メンバーは進行を兼ねた当時の紅野敏郎館長、俳人の廣瀬さん、そして歌人の私。「お二人にはエロスがないのでは」と紅野館長に問われて反応に困ったことが記憶の遠くに残っている。

もう一度は龍太先生が亡くなられた数カ月後に行われた追悼座談会「龍太の沈黙と向き合う」。「現代詩手帖特集版 飯田龍太の時代」のための企画だった。場所は笛吹市一宮町上矢作の廣瀬邸。齋藤慎爾、宗田安正両氏を含めたそれは雑誌で確認して頂くとして、終了後に廣瀬さんが育てた葡萄からの赤ワインを一升瓶で楽しんだ。葡萄の剪定した枝からは春先に樹液が出るそうで、「それがいいもんでね。こんどぜひいらつしやい」と語ったときの笑顔が忘れられない。

廣瀬俳句に通じる包容力を感じさせるその笑顔に励まされながら、氏の志が込められた山梨県立文学館のために微力を尽くしたい。

(歌人・当館館長)

* 廣瀬直人氏(俳人)は山梨県立文学館学芸課

長、後、参与として勤務。本年三月一日逝去されました。

閲覧室より

思い思いの過ごし方で

先日閲覧室のカウンターで、ひとりの年配の女性から声をかけられた。タイトルは忘れてしまったのだが、若いころに読んだ詩をもう一度読みたくて、探しているという。作者や内容を伺って、作品集の中から、心当たりのものを何篇か見せていただいた。「ああ、これだわ」と小さく叫んで、カウンターの前の椅子に座り、つぶやくようにして読んだあと、手帖に書き留めて何度もお礼を言つて帰られた。探しものが見つかつて喜んでもらえると、こちらまで嬉しくなる。

女性の後ろ姿を見送りながら、ふと思いついたことがあった。何年前かに、職場体験に来た高校生から届いたお礼の手紙のことである。授業の一環として三日間、館内のいろいろな部署で、実際に業務を体験してもらった。体験後、何日かして届いた手紙は、おそらく学校で指導されたと思われる形式的なお礼の言葉で始まっていたが、後半部分は少し違っていた。

いくつかの担当を順にまわり、いろいろな仕事を体験して、それぞれの担当職員に、「この仕事をしていてよかったですか」というのはどんなときですか」と質問したところ、ほぼ全員の職員が「一生懸命仕事

をして、誰かに喜んでもらえたとき」と答えた、そのことがとても印象に残った、と書かれていた。なるほど、自分もそのように答えた記憶している。

記憶をさらに遡ると、自分が就職試験を受けた時、面接で「働くとはあなたにとってどういうことですか」という問いに、当時友人に勧められて読んだばかりだった三浦綾子の「氷点」から、「働くとは、はたのものが楽になること」という一節を拝借して答えたことが思い出される。働いたことのない学生が生意気なことを言つたと恥ずかしくなるが、今では素直に肯ける。いくつかの言葉のやり取りから相手の望んでいることを理解し、それに応えられるように力を尽くし、よい結果が出せた時は、充実感が得られるものである。

当館の閲覧室を訪れる方々には、少しでも喜びを持ち帰っていただければ嬉しく思う。

閲覧室の利用のしかたは人によって様々である。歴代の芥川賞受賞作を順に読んでいる人、散歩の途中で立ち寄り、新聞や雑誌を読んでいかれる方、講座を受講したあとに疑問点を調べに来る方、なんとなく迷い込んでしまった方など。思い思いの過ごし方でかまわない。自分だけの文学と向き合う時間を閲覧室で楽しんでいただきたい。

(資料情報課 飯沼典子)

教育普及事業より

○三枝浩樹初心者短歌教室

五月十三日と十九日の二日間にはわたり、山梨県歌人協会会長の三枝浩樹氏を講師とする初心者向けの短歌教室を実施した。第一回は「歌を詠む愉しさから始めよう」をテーマに短歌の基本について講義で学んだ。二回目は参加者の実作した歌をもとに講義が進められた。「初心者にしては素晴らしい」との講師の講評に、会場の研修室は和やかな雰囲気にも包まれた。最終回の六月二十四日には参加者による歌会を実施する予定。

○特設展「井伏鱒二展 旅好き釣り好き温泉好き」関連ワークショップ

「羊毛フェルトで山椒魚を作ろう」
六月二日、フィットンチッド工房・小澤美智子氏を講師に、ワークショップを実施した。ニードルフェルトという手芸の一つを用いて、井伏鱒二の代表作「山椒魚」をモデルにしたマスコットを製作した。

館からのご案内

■教育普及事業

○文学創作教室 要申込

「わたしを創ったもの」

7月14日(土) 午後1時30分

講師 神永学(作家)

○夏のワークショップ 要申込

・「子どもとその保護者のための『俳句入門』」

7月7日(土) 午後1時30分

講師 井上康明(俳人)

・「あなたの心を鏡開き 太神楽の世界を体験しよう」

7月31日(火) 10時20分

講師 丸一仙三・仙花

(かがみもち(夫婦太神楽))

○年間文学講座 要申込

講座1・2とも午後2時

・講座1 『裏見寒話』をよむ―甲府勤番士の捉えた「やまなし」の人・文化・ことば―

講師 長谷川千秋(山梨大学教授)

6月30日(土)・7月28日(土)・8月31日(金)

講座2 『日本文学と富士山―近代を中心に―』

講師 菊池有希(都留文科大学准教授)

授) 6月21日(木)

野口哲也(都留文科大学准教授)

授) 7月26日(木)・8月2日(木)

古川裕佳(都留文科大学教授)

9月6日(木)

※各催しの詳細についてはお問い合わせください。

※要申込の講座につきましては、お電話か当館受付でお申込ください。

○子ども映画会 申込不要

「赤毛のアン」

8月5日(日) 午後1時30分

■展示室

常設展

○第一・四室(展示室A) 展示替え

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など

山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する

各コーナーの展示替えとともに、第一

室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・夏の常設展

「高浜虚子と山中湖の虚子山荘」

6月5日(火)～8月26日(日)

・秋の常設展「熊王徳平」

8月28日(火)～12月2日(日)

○第五室(展示室B)の展示替え

山梨出身・ゆかりの文学者104名を

二期に分けて展示しています。

・小説・評論・随筆・翻訳・ジャーナリズム・戯曲・脚本・童話・童謡

4月28日(土)～9月2日(日)

・詩・短歌・俳句・川柳・漢詩

10月6日(土)～平成31年3月10日(日)

※第五室は、9月4日(火)～10月5日(金)は休室します。

(金)は休室します。

■閲覧室

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

太宰治(6月19日生まれ)

6月8日(金)～6月28日(木)

辻邦生(9月24日生まれ)

9月7日(金)～9月27日(木)

「寄贈資料より」 (平成三十年二月～四月)

○布川謙氏より澤柳大五郎「太田先生と美術に関する断片」原稿ほか特殊資料二三七点、図書八四点、逐次刊行物四八点。

○横瀬信子氏より横瀬信子画「エンディングノート」挿絵原画二〇点。

○宇野さおり氏より宇野さおり画「菓子折り」挿絵原画七点。

○針生卓治氏より針生卓治画「まいべえら」挿絵原画七点。

○田中文字氏より飯田龍太書簡ほか九点。

○佐佐木幸綱氏より佐佐木幸綱「ゆく水のしぶき渦巻き裂けてなる一本川お前を抱く」一枚物。

○秋山正統氏より秋山秋紅筆・画「秋空のあのやまもこの山もふるさと」一枚物など四五点。

○梶原孝浩氏より飯田蛇笏書簡など五点。

○中山福美氏より中山堅恵「あだ名」原稿など二〇点。

○上田雅人氏より山崎方代「寿」色紙など二五点。

○小山弘明氏より「第六二回連翹忌」リーフレット、図書一点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

相澤 邦衛 清水 奈緒子

石丸 一夫 中嶋 長續

石割 透 長瀬 和美

市川 榮次 中村 吾郎

一瀬 公弘 野澤 俊之

井上 芳寛 秦 恒平

大野 とくよ 平松 伴子

尾崎 左永子 堀内 万寿夫

川村 湊 吉川 豊子

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

資料翻刻

当館所蔵の津島美知子の早川徳治宛葉書八通を翻刻する。

太宰治の妻・津島美知子(一九二二〜一九九七)は、島根県那賀郡浜田町(現浜田市)に生まれ、その後父・石原初太郎の郷里・山梨に移り住み、甲府高等女学校(現甲府西高等学校)から東京女子師範学校(現お茶の水女子大学文科)へ進学、一九三三(昭和八)年に卒業。八月より都留高等女学校(現都留高等学校)で地理・歴史の教鞭をとった。一九三九年、太宰治と結婚、一男二女を儲けた。一九四八年六月に太宰が歿した後、創芸社から刊行された文庫版の『太宰治全集』(全十六巻 一九五二〜一九五五年)巻末に収められた「後記」には、作品の発表年月、掲載誌とともに回想を美知子が執筆した。また、一九七八年五月に『回想の太宰治』(人文書院)、美知子歿後の一九九七年八月、『回想の太宰治 増補改訂版』(人文書院)が刊行された。

宛名の早川徳治は、講談社の編集者。書簡の消印は年が判読不能だが、発信の住所「三鷹町下連雀」に美知子が暮らしたのは一九四八年十二月頃までであることから、一九四八年の書簡と推定した。太宰の歿後間もない時期に、早川の手を借りながら、年譜作成のための調査や著書の収集に尽力する美知子の姿が伝わってくる内容の書簡である。

なお、石川博「生」の魅力 第四章 俳諧雑考 として 津島美知子と津島佑子「猫町文庫」第五集二〇一六年七月)に、一九五三年から一九五四年かけての美知子の早川徳治宛書簡五通の翻刻が掲載、この五通の書簡も石川氏のご寄贈により当館に収蔵されている。 註記にあたり、山内祥史『太宰治の年譜』(二〇一二年十二月大修館書店)などを参考にした。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年(推定)七月二十八日

猛暑の折柄御障りも無く御過し遊ばされますか 先日

は「惜別」の件でいろ／＼有難うございました。その後大分経ちましたが進捗状況は如何でございませうか。発売されましたつは何卒印税の方も差額を御精算いたゞき度く誠に恐れ入りますがよろしく御取計らひ下さいませ御願申し上げます 先は要用のみ 七月廿八日

〈受〉文京区音羽町三ノ一九 講談社 早川徳治様

〈発〉三鷹町下連雀一三三 津島美知子

〈註〉五十銭の官製葉書にブラックインクのペン書き、消印は判読不能。「惜別」の改訂版が大日本雄弁会講談社より一九四七年四月に刊行。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年七月頃(推定)日不明

昨日は御暑いところいろ／＼有難うございました。すつかりいゝ御本になつて喜んでをります つきまして豊島先生はじめ井伏、亀井、伊馬、今官一の五人の方々には本の出る度見て頂く事になつてゐますので何卒御送り下さいませ それから太宰の原稿(光と群像の計三篇)は十日頃早川様御いで下さる時、御持参願へませんでせうか 勝手ばかり申上げて恐れ入りますが御願申上げます。又、「惜別」をもう五部欲しいと思ひますが著者買上げとして御届け頂き度いのでございませう 右何卒宜しく願ひ上げます

〈受〉文京区音羽三ノ一九 講談社出版部 早川徳治様

〈発〉都下三鷹町下連雀一三三 太宰内

〈註〉五十銭の官製葉書に墨書、消印は判読不能。末尾に黒インクのペン書きで発信者以外の筆跡と思われる「スミ□野」の記載がある。『太宰治全集』は、一九四八年七月に八雲書店から刊行が始まり、全十八巻の予定であったが、八雲書店の倒産により十四冊で刊行が終わる。編集を豊島与志雄、井伏鱒二、石川淳、伊馬春部、亀井勝一郎が務める。『惜別』(一九四八年七月 大日本雄弁会講談社)が刊行された七月頃の書簡と推定した。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年(推定)八月十四日消印

先日から度々御暑いところを有難うございました。又今日は芥川賞当時の記録をわざ／＼おしらせ下さいましてほんとにうれしく御好意心から御礼申し上げます。

「新潮社」から、田中英光氏の解説編纂で、太宰の自叙伝？が出来ます由で、それにも年譜が必要でございませうので、一番大切な記録が御蔭さまでわかりましてどんなに助かるかわかりません。それから太宰の著作御ゆづり下さいませ由、折角貴重な御蔵書をほんとに申訳ないと思ひますが、太宰宅に一そろひ備へてをく事は、どうしても必要と存じますからどうかぜひ御願申上げます。全集は必ず全巻御贈り申します。今日三鷹の古本やで写真入り富岳百景の二版をみつけましたが、とても／＼汚い本でしたがとりあへず買つてまゐりました

では又何かと御厄介になりますどうぞよろしく 新林様からも御芳書頂きましたどうぞよろしく御伝へ下さいませ

〈受〉文京区音羽三ノ一九 講談社出版部 早川徳治様

〈発〉都下三鷹町下連雀一三三 津島美知子

〈註〉五十銭の官製葉書にブルーおよびブラックインクのペン書き、消印は「武蔵野□・8・14」。『太宰治展 生誕100年』(二〇〇九年 当館発行)に図版を収録。田中英光編集の『自叙伝全集太宰治』(一九四八年十月 新潮社)に収録する年譜作成のため、芥川賞の記録を知らせてくれたことへの礼状。一九三五年七月、太宰の「逆行」(「文藝」同年二月)が、第一回芥川賞の候補作補となつたが落選した。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年(推定)八月二十一日

昨日は御手紙有難う存じます。透谷賞のことその他くわしく御調べ下さいましてほんとに有難うございました

御好意心から御礼を申し上げます。芥川賞透谷賞のこと、新潮社の自叙伝全集に書入れさせていたゞきました。それから本日は御蔵書わざゞ御送り下さいまして有難うございます

貴重な御本御ゆづりいたゞき何とも御礼の言葉もございません。永く当家に保存させていたゞきます。全集は八雲から直接御届け申上げます。社宛でよろしくございませうね。

今後何卒、太宰の出版物について御腹藏無い御意見をおきかせ下さいませ、折入つて御願申上げます。「風の便り」「女性」「正義と微笑錦城版」「晩年養徳社版」「女神」おみつけになりましたら何卒御願申します。とりいそぎ御礼まで 早々

〈受〉文京区音羽町 講談社出版部 早川徳治様
〈発〉8. 21 三鷹下連雀 津島内

〈註〉五十銭の官製葉書にブラックインクのペン書き、消印「武蔵野□.□.21」。一九四〇年十二月、太宰『女生徒』が第四回北村透谷記念文学賞の副賞に選ばれた。末尾の書名はいずれも太宰の著書『風の便り』(一九四二年七月 利根書房)、『女性』(一九四二年十二月 博文館)、『正義と微笑』(一九四二年六月 錦城出版社)、『晩年』(一九四六年四月 養徳社)、『女神』(一九四七年十月 白文社)のこと。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年(推定)八月二十八日

その後も御元氣にお過しでせうか先日色々有難うございました。御好意厚く御礼を申上げます。さて書物の方、「女神」と「津軽」(小山版) 入手出来ましたから、御心配無く。

「女性」「晩年」(養徳社版)「佳日」(肇書房)「廿世紀旗手」(版画社文庫)の四部どうか御願申上げます。御みつけ下さいましたら本の方はいつでもよろしくございますからどうかその旨御一報下さいますよう御願申上げます。

とりいそぎ要用のみ

〈受〉文京区音羽町 講談社出版部 早川徳治様
〈発〉8. 28 三鷹市下連雀一三三 津島美知子

〈註〉五十銭の官製葉書にブラックインクのペン書き、消印は「武蔵野□.□.29」。太宰の著書に「津軽」(新風土記叢書7 一九四四年十一月 小山書店)、『佳日』(一九四四年八月 肇書房)、『二十世紀旗手』(一九三七年七月 版画社)がある。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年(推定)九月十二日

残暑おきびしうございます その後御障りも無くいらつしやいますか。今日は又「風の便り」と「斜陽」わざゞ御送り下さいましてまことに有難く厚く御礼を申上げます

「風の便り」などまことになつかしく久し振りに我が子にでも逢つたような気がいたしました御厚情心から御礼を申上げます

全集第一巻「晩年」が出ましたので近日中に御届け申上げます。では今後とも何卒よろしく御願申上げます。とりいそぎ御礼迄

九月十二日

〈受〉文京区音羽町 講談社出版部 早川徳治様
〈発〉都下三鷹町下連雀一三三 津島美知子

〈註〉五十銭の官製葉書にブラックインクのペン書き、消印は判読不能。「斜陽」(新潮社)は、一九四七年十二月に初版が、翌年七月に改装版が刊行。『太宰治全集』(八雲書店)は、第一巻(一九四八年九月)に「晩年」を収録。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年九月(推定)二十二日消印

御手紙有難う存じます 全集の方、大変献本の数が多い由で、手ぬかりがございましてはいけませんのでこちらから今後御送り申します 写真と原稿、今暫くどうか御待ち下さいませ それから「佳日」まだございましたら欲しいのですが御求めをき下さいませんでせうか うちのは「黄村先生」を作りましたためにバラバラになつてゐますので一冊別に保存したいと思ひます いそぎませんで、御序の折で結構でございます

ろくく勝手ばかり御願ひして申訳ございませんが何卒よろしく御願いたします。今月末に第四回「おしやれ童子」が出ますはづ、届き次第御送り申上げます 私共変りなく当分このまゝ住つてあります御序もあらば御立より下さいませ

新林様にも何卒よろしく

〈受〉文京区音羽町三ノ一九 講談社出版部 早川徳治様
〈発〉三鷹町下連雀一三三 太宰内

〈註〉五十銭の官製葉書に墨書、消印は「□□.□.22」。『佳日』(前掲)に「黄村先生言行録」が、『太宰治全集』第四巻の短篇集に「おしやれ童子」が、それぞれ収録されている。全集第四巻が一九四八年九月に刊行されたことから、九月の書簡と推定した。

津島美知子 早川徳治宛葉書

一九四八年十月(推定)八日消印

朝夕大分お寒くなりました

此度は又「佳日」御送り下さいまして有難う存じます。度々御忙しいところ御手数かけまして申訳もございません 又園子にいゝ御本頂戴いたし重ね々ありがたうござ

います 御好意心から御礼申上げます 「おしやれ童子」一部刷りましたよしこちらへ届き次第御送りいたします

新林様御変りいらつしやいませんか何卒よろしく御伝へ下さいませととりあへず御礼迄

〈受〉文京区音羽町 講談社出版部 早川徳治様
〈発〉東京むさし野局区内 三鷹町下連雀一三三 津島美知子

〈註〉五十銭の官製葉書に墨書、消印は「□□.□.8」。前掲一九四八年九月(推定)二十二日に続く、全集第四巻刊行後の十月の書簡と推定した。「新林様」については未詳。

(学芸課 中野和子)

館 の 日 誌

- 3・13 (火) 春の常設展 期間限定公開「竹中英太郎・竹中労」(~6・3)
- 3・17 (土) やまなし文学賞表彰式
- 4・20 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「飯田蛇笏」(~5・10)
- 4・22 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 4・28 (土) 特設展「生誕120年 井伏鱒二展 旅好き 釣り好き 温泉好き」開始(~6・17)
閲覧室資料紹介「井伏鱒二を読む」(~6・17)
- 4・29 (日・祝)「俳句を始めよう! 大人のための初心者俳句ワークショップ」
講師 井上康明(俳人)
- 5・6 (日) 茶室「素心菴」にて呈茶
- 5・12 (土) 年間文学講座3 (特設展「井伏鱒二展」関連講座)「井伏鱒二と山梨」
講師 中野和子(当館学芸員)
- 5・13 (日) 初心者短歌教室第1回
講師 三枝浩樹(歌人)
第1回読書会
- 5・17 (木) 年間文学講座2「日本文学と富士山~近代を中心に」「北村透谷と富士山」
講師 菊池有希(都留文科大学准教授)
- 5・19 (土) 初心者短歌教室第2回
講師 三枝浩樹(歌人)
- 5・20 (日) 名作映画鑑賞会「黒い雨」
- 6・2 (土) 特設展関連ワークショップ
「羊毛フェルトで山椒魚を作ろう!」
講師 小澤美智子(フィットンチッド工房)
- 6・5 (火) 夏の常設展 期間限定公開
「高浜虚子と山中湖の虚子山荘」(~8・26)
- 6・8 (金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介「太宰治」(~6・28)
- 6・9 (土) 年間文学講座1「裏見寒話をよむ—甲府勤番士の捉えた『やまなし』の人・文化・ことば」「はじめは信玄公誕生—『中興略説』」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
書庫見学
- 6・10 (日) 町田康講演会「井伏鱒二の笑いと悲しみ」
講師 町田康(作家)
第2回読書会

利用のご案内

■開館時間

- 展示室 9:00~17:00 (入室は16:30まで)
- 閲覧室・研究室 9:00~19:00 (土・日・祝日は18:00まで)
- 講堂・研修室 9:00~21:00
- 茶室 9:00~21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)
- ミュージアムショップ 9:30~16:20

■休館日(7月~9月)

- 7月2・9・17・23・30日
- 8月6・20・27日
- 9月3・10・18・25日

■常設展観覧料

| | 常 設 展 | | |
|-----|-------|---------------|--------------|
| | 個人 | 団体 (20名以上) | 美術館との 共通券 |
| 一般 | 320円 | 250円 | 670円 |
| 大学生 | 210円 | 170円 | 340円 |

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳ご持参の方、およびその介護をされる方、並びに高校生以下の観覧料は無料です。

■年間フリーパスポート(定期観覧券)のご案内

文学館常設展・企画展を1年間何回でも観覧できる年間フリーパスポート(定期観覧券)を発売しています。料金は、一般1,540円、大学生770円です。

■県内宿泊施設利用者割引のご案内

山梨県内の宿泊施設へ宿泊または宿泊予約された方で、宿泊当日または翌日に観覧される場合、個人でも団体料金でご観覧いただけます。宿泊(予定)を証明する

もの(領収書・予約クーポン券等)を窓口へ提示してください。なお20名様以上の団体は対象になりません。

■施設利用のお申込について

- 講堂・研修室・研究室・茶室の申込は、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。
- ☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込の際、ご説明いたします。

■アクセス

中央自動車道甲府昭和ICから

料金所を昇仙峡・湯村方面へ出、200m先左折、西条北交差点左折、アルプス通りを約2km直進、貢川交番前交差点左折、国道52号を韮崎方面約1km左側。

JR中央本線甲府駅から

南口バスターミナル1番乗り場から「貢川^{くがわ}団地」、「大草^{おほくさ}經由韮崎駅」、「竜王駅經由敷島営業所」、「御勅使^{みちだいら}」行のいずれかで約15分。「山梨県立美術館」下車。(料金280円)。タクシーで約15分(料金1,700円程度)

山梨県立文学館 館報 第105号
平成30年6月10日発行

編集兼
発行人 三枝 昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎ 055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>
※紙面・記事・写真等の無断転載・転用はお断りします。